

## 故石田 剛教授を偲んで

本『広島修大論集—人文編』第38巻第2号が故石田 剛教授の追悼号として刊行されるに際して、私の心象のなかの在りし日の石田教授のおりふしの姿を思いえがき、追悼の辞としたいと思う。

今年の春以来、このキャンパスのなかで、時として、例えば夕方ようやく会議を終えて本館から第一研究棟の研究室に帰る途中、また時には昼食時に食堂に向かう坂道で、ふと「このところ石田先生をお見かけしないな」と思った瞬間、「あっ、そうだった」と我に返ることがある。石田教授のご逝去は余りにも突然であった。私立大学にとって一大事業の一つである入学試験も無事に終了して間もない本年の2月18日、石田教授は忽然と亡くなった。この訃報を耳にした時、到底信じがたいものであったし、今なお石田教授のご急逝は実感として受けとめがたい。こうした思いは恐らく私一人ではないであろう。

故石田教授は、1991年4月1日付けをもって、本学人文学部の社会学担当専任教授として就任されており、先生の本学でのご勤務は約6年間である。先生は、お若い頃から研究意欲が極めて旺盛であったと他大学の同じ分野の研究者からお聞きしたことがあるが、この間の先生の研究活動は目覚ましく、論文「アメリカの指導的大学の卓越性と異質性」や「大学の客観的組織間評価を目ざして」などをはじめ数多くの論文や論評を公にされている。また1995年8月から翌年8月にかけての一年間は、米国メイン州に所在するボードゥン・カレッジ (Bowdoin College) の客員研究員としてご活躍された。

石田先生のご研究の業績のなかには、本学のみならず、現在の日本の大学が直面している諸問題の打開策を探る上で貴重な示唆が蓄積されている。これに関連して思い起こせば、本年1月21日、先生は大学改革に関する学内研修会の講師として、日米大学の比較の観点から日本の大学改革の課題について熱意をもって語られた。その講演内容の一部は本学の『TRUTH』

(1997・5春号, PP.10-11)に掲載されている。この研究において大学を取り巻く問題状況について多くを学び、感銘を覚えたのもまた私一人ではないであろう。

先生は、研究への意欲にもまして、学生の指導・教育にたいしても実にひたむきな先生のお一人であった。学生たちのあれこれの話のなかで、一人の社会学専攻の学生が石田先生の授業には先生の情熱を強く感じると話していたという。実際、どれほど忙しくても、学生の言葉に丁寧に耳を傾けられる先生であったと思う。石田先生は教育研究において、まさしく情熱、柔軟さと厳しさをもって活動され、そこに泰然とした雰囲気醸し出されていた。先にご紹介した研修会に関連して、後日、先生の次のようなコメントが『広島修道大学広報』(1997年1月31日, 第169号)に記されている。「広島修道大学の発展の目標を、アメリカの一流大学と肩を並べることにしよう。私のこの無謀な提案は、案外実現するかもしれない」。いかにも石田先生らしく、はるか遠くを見据え、その目標地点を見定めようとするかの思いを込めた展望である。もはや先生が私たちに伝えられようとしたそのご意思をお聞きする術はない。

教授会の席にあって、発言をされようとする場合、石田先生はいつも笑顔で人差し指を立てていられた姿が鮮明に思い起こされる。

ご生前の、優しい笑みを絶やされることのなかった石田先生の面影を偲びつつ、心からご冥福をお祈りしたい。

1997年10月

人文学部長 森 川 泉